地球を救う日本国憲法

時代を読む

浜　矩子

地球を救う日本国憲法

「日本国民は、正当に選挙された国会における代表者を通じて行動し、われらとわれらの子孫のために、諸国民との協和による成果と、わが国全土にわたつて自由のもたらす恵沢を確保し、政府の行為によつて再び戦争の惨禍が起ることのないやうにすることを決意し、ここに主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定する。」（日本国憲法前文一項）

諸国民との協和。何とも美しく、何とも格調高い言葉だ。そして、実に今日的である。ヒト・モノ・カネが国境を越えるグローバル時代において、諸国民は、いつもいつも、お互いに協和していなければ、生きていけない。少しでも、不協和が生じれば、グローバル経済は破綻する。みんな一蓮托生。誰もが誰かとつながっている。誰もが誰かの力を借りている。

グローバル時代を生きる知恵。それを日本国憲法が我々のために用意してくれていた。そのように思える。グローバル時代は、諸国共生の時代だ。そうでなければ、諸国民は自らの手でグローバル時代を終焉に追い込んでしまう。そのようなことにならないように、諸国民がグローバル時代に到達するのを、日本国憲法がじっと待ってくれていた。日本国憲法はグローバル時代の救世主だ。

その救世主の息の根を止めようとする動きがある。日本国憲法に力強く高らかに刻み込まれた諸国共生の理念を、富国強兵の理不尽が踏みにじろうとしている。何ということか。

グローバル時代という今日の時代状況を挟んで、諸国共生と富国強兵は相互に対極の位置にある。富国強兵は、グローバル時代の時代環境と、最も相性の悪い発想だ。誰も一人では生きていけないグローバル時代において、富国強兵がぶつかり合えば、国境を越えた諸国民の絆はぶつ切りにされる。地球経済を回している相互依存の構図が、無残に引きちぎられて行く。対照的に、諸国共生はグローバル時代と実に相性がいい。ここで頭に浮かぶのが、ヨーロッパの古い格言だ。十四～十五世紀辺りから登場しているらしい。その内容は次の通りだ。

「釘一本が欠けたから、蹄鉄一つが失われ、蹄鉄一つが欠けたから、馬一頭が失われ、馬一頭が欠けたから、一人の騎士が失われ、一人の騎士が欠けたため、一つの戦に敗北し、一つの戦に負けたため、王国一つが無くなった。」

グローバル時代においては、生産体系が国境を越えて広がる。日本企業が世に送り出す製品が、日本国内で製造されているとは限らない。メード・バイ日本企業の製品なら、必ずメード・イン日本だとはいえない時代になっているのである。そのような中では、誰が誰に対して釘一本の供給者になるか解らない。誰が誰に対して、馬一頭を提供する役回りを担うか解らない。誰の不在が誰にダメージを及ぼすか解らない。誰の不義理が誰をどう傷つけるか解らない。そういう仕組みになっている。

だからこそ、諸国共生でなければ、誰もやっていけないのである。誰もが誰とでも協和する。これはとてつもなく難しいことだ。だが、この難しいことに挑む知恵と勇気がなければ、地球経済は滅びに向かう。

こんなグローバル時代の生き方を、日本国憲法が我々に示してくれている。筆舌に尽くし難く大事な救世主だ。（同志社大教授）

2014.6.29 東京新聞より